

N o g a t a

2022、10、26

直方ミニバスケットボールクラブだより

共育コラム

子どもの力～「人は必ず変わる（成長する）ことができる」～

子どもとの約束

こここのところ、断続的に入部を希望する子どもが体育館に見学や体験入部でやってきます。友だちに誘われてというのが多いですが、最近はホームページを見て…という声もよく耳にするようになりました。

直方クラブの入部する際には、主となる約束事が3つあります。1つは「学校優先」ということ、2つめは、「クラブのルールやマナーを守る」ということ、3つめは「小学校卒業まで続ける」ということです。この3つのことが約束できるなら、「入部を許可します」と本人に確認しています。

それぞれについてもう少ししていねいに説明すると、次のようなこととなります。

「学校優先」という意味は、まずは、学校のことをちゃんとして活動に参加しよう、ということです。学校でしなければならないことをおろそかにして、バスケットは好きだからするというのはだめ、ということです。学校のことをおろそかにして、いくらバスケットがうまいからと言っても、友だちや先生を困らせて迷惑をかけながらでは、だれも評価してくれない。「バスケットはうまいかもしれないけど、学校では、みんなに迷惑ばかりかけとうもんね」「チームは強いかもしれないけど、学校のことをちゃんとせんもんね」では、活動を続けることはできないということです。地域に根ざしたクラブづくりをめざしています。自分たちががんばっていることは、地域みんなが応援してくれる、それを通して地域の人たちどうしもつながり、子どもたちの成長をともに喜んでもらえる、そういうクラブでありたいと考えて取り組んでいます。

「クラブのルールやマナーを守る」というのは、文字通り、そのままのことです。「あいさつをしよう」にはじまり、「くつはきちんとならべよう」、「準備や片づけをちゃんとしてよう」など、日常の細かなことから、たまにある合同練習や練習試合、大会参加の時など、特別な状況におけるものまで、たくさんことがあります。習慣化できるものもありますが、予期せぬことが起きて臨機応変の対応を求められることもあります。なので、いちいち紙に書いて確認するようなことはしていません。その場の状況を見て、自分で考え判断して行動できる力を身につけることを求めています。

「言われたことしかしない」では「言われてないことはしない」ことになってしまう。しかし、いつも監督がつきっきりで指示することはできない。ある程度のことは、自分（たち）で考え判断し行動できる力をもつ必要がある。それは、バスケットのプレーにもつながること。ただし、わからない（判断が難しい）ことがあったら、自分からすぐに尋ねにくること、わからないまま立ちつくして時間ばかりやり過ごしてしまうようではだめだ。自分から尋ねにくるということのも自主的、主体的な活動。これは、勉強のしかたにもつながること。

このようなことも併せて求めています。

「**小学校卒業まで続ける**」というのも、ことは通りですが、その思いは次のようなことです。

バスケはチームスポーツです。チームづくりは、年単位で長期を見据えて取り組みます。子どもたちにもそのことを自覚させます。低学年で入部した子どもたちの先は長く、モチベーションを保つには、日々の活動を楽しむことと先の目標が必要です。そんななかで出入りが自由になってしまうと、チームづくりに支障をきたし、子どもたちをがっかりさせる（モチベーションを下げてしまう）ことになったり、その後の関係に傷を残したりすることもあるからです。

小学校卒業後、中学校に進学した時には、そのままバスケットを続けるか、新たに別な活動にチャレンジするか、いわゆる「帰宅部」で別なことに励むか、それは、その時あらためて自分で決めればいいし、どれを選択しても自分で考えて決めたことであればいいし、それが大事だと話しています。

そうは言っても、さまざまなトラブルで、活動を続けるのが苦しくなることはあるでしょう。できるだけそうならないように努力はしていますが、問題はクラブのなかだけのことでなく、学校や地域で起きることもあるので、どうしても限界があります。目が行き届かず、気づいてあげられなかったりすることがあります。何か気がかりなことあるときは、遠慮なく早めにお声かけください。子どものことですから時間がたってしまうと、記憶があいまいになり、事実を確認することが難しくなることがほとんどです。そうなると、解決が困難になることも少なくありません。ただ、ご相談いただいたからといってすぐには解決しないこともあります。子どもの変化（成長）には時間がかかります。すぐには解決しなくても、問題・課題を周りの人が共有しておいて、みんなで日頃から気にかけて、見守り、励まし、応援していくことで、子どもは必ず変化（成長）します。そのことを子どもたちが自らの体験をもとに、私たちおとなに教えてくれます。

.....

子どもの力 ～「人は必ず変わる（成長する）ことができる」～

最近の子どもたちのようすを見聞きするなかで気になっていたことについて、子どもたちを中心に、個別に、学年別に、練習グループ別に…と、ていねいに聴き取りをし、学校生活や友だち関係などの現状などを把握してきました。そこから明らかになった課題について、その解決に向けてどのように取り組んでいくか、時間はかかりましたが、子どもたちと対話を重ね、それぞれにできること、しなければならぬことを確認しました。

下記は、10月23日（日）男子の高学年を中心としたミーティングのなかで、6年生が学校生活に困り感をもっている子に語ってくれたことばです。

自分も以前は、いやなことから逃げて、みんなに迷惑ばかりかけてきた。自分は心が弱いところがあって、すぐはらかいたり、あきらめたりすることがあって…。

でも、自分には大好きなものがあって、それがバスケットだった。このままだったら、大好きなバスケットができなくなる、変わらないけんと思った。でも、思ったからと言って、そう簡単に変わるものじゃない。時間はかかったし、今も完璧じゃないけど、ようやく今の自分にまでなれてきた。それは、この間、ずっと自分を応援し見守ってくれた人がいたからで、自分一人の力では変われなかった。それに、あの頃の自分だったら、普通はみんな、かかわらんごとしようと思うと思うけど、でも自分を見捨てずにかかわってくれた友だちや先生がいてくれた。だから変わってこれた。自分一人ではなんともならんときもある。そんなときは、自分一人でなんとかしようと思わんで、だれかにたよったらいい。自分たちにたよってくれてもいい。できることは、自分たちもするから…。ただ、ずっとたよりっぱなしではだめで、自分も努力しようとするのが大事。それは忘れんで…。

人は自分一人では変われんけど、支えてくれる人、応援してくれる人、かかわってくれる人がいたら、必ず変わる。だから、自分を支えてくれる、応援してくれる、かかわってくれる、その人たちを大切にしないとイケない。人は必ず変わる（成長する）ことができる。

感情を高ぶらせるわけでもなく、とつとつと語ってくれることばに、私も聴き入っていました。

この発言を皮切りに、6年生が一人ひとり、自分の経験（失敗やつまずきも含む）をふまえて、ことばをつないでくれました。

「自分は以前、宿題をちゃんとしていけないときがあったけど、今は…」

「自分もこの前、失敗してみんなに迷惑をかけたけど、今は…」

「自分も、以前はやんちゃしてて、迷惑をかけてきたけど、今は…」

「自分が、また同じような失敗をしかけたとき、友だちが止めてくれて失敗せずにすんだ…」

「自分一人でなんとかしようと思わんで、むずかしいときは、人を、誰かをたよったらいい…」

「自分も失敗することがあって言える立場じゃないかもしれんけど、できることがあればするので、自分たちをたよって…」

こんな質の発言が続きます。うまく気持ちをことばに置き換えることができず、途中で言えなくなる子もいましたが、なんとか伝えたい、という思いは分かりました。ことばを紡ぐって、こんなことだと思いました。原稿を用意していたわけでもなく、メモしたものがあってもないなかで、自分の気持ちをこんなかたちで切々と語るができる子どもたちの力に感服しました。おとなはつい説教調になりがちですが、子どもたち（6年生）は自分のことを重ね、子どもとして対等な目線で、チームメイトを応援する立場でアドバイスしてくれます。これまでの「失敗」が、ちゃんと「学び」に変えられていることがわかります。すごい「学習力」だと思います。もちろん、「まだ自分が言える立場ではありませんが…」と自戒も込めて言っているように、まだ完璧ではありません。これからも失敗することやつまずくことはあるでしょう。それでも自覚に基づいて言っている子どもはすごいと思います。そもそも人間に完璧なんてありません。おとなだって、完璧な人はいません。私もその一人です。迷うし、悩むし、失敗することもあります。だからこそ、子ども時代のこのような経験がとても大事で、のちのち生きてはたらく力となります。

.....

教職時代をふりかえって ～子どもの成長には多くの人（他者）の力が必要～

教職を離れてすでに4年が経ちます。退職時に、もう教師として教室で子どもたちと「学級をつくる」という教育の営みをするとはなくなるなど、感慨深く思いました。担任のときに、日々授業を行いつつ、学習の基盤となる環境づくり（学級づくり、学年づくり）のために、子どもたちと対話（話し合い）を重ねてきました。子どもの状態がきびしいときには緊張の毎日でした。きびしく叱責しなければならないこともありました。しかし、そんななかでもほんの少しの子どもの言動の変化に喜びを感じ、それを評価し、みんなで共有し、その後のがんばりにつなぐために、見守り、励まし、応援していきます。それを繰り返すことで子どもは変わって（成長して）いきます。

また、望ましい成長のためには、人（他者）のかかわりが絶対的に必要です。授業をはじめさまざまな教育活動に、行政や地域の人たちを呼び込み、あるいは出向き、出会いと体験を通して、子どもはリアルな学習を重ねていきます。教育内容は、担任一人が教えるものではなく、多様な人たちの力を借りていっしょに学び育ててもらうのが効果的です。それをつなぎあわせる（コーディネートする）のが、私の役割と思って取り組んできました。

特に教職の後半は、子ども支援（サポート）にあたる役割が多かったので、さまざまな特性をもつ子どもたちを支援する取り組みを行ってきました。当然私一人の力で解決できる課題ではありません。教育機関はもちろん、福祉機関、医療機関、公共施設等の人たちとつながり、力を寄せてもらって、この子にとってどのように支援していくことが最善かを考えて取り組みました。子どもの成長は、親の力だけでも、教師の力だけでも、望ましい方向に進まないことが多々あります。そんなとき大切なことは人のつながりです。相談できる人を複数もっておくことです。どんなに高い学力をもっても、どんなに高い運動能力をもっても、どんなに優秀な成績をあげても、人（他者）とのつながりのなかで「生きる力」としての学びを重ね、人格の形成がはかられていかなければ、必ずどこかでつまずきます。つまずいたとき、立ち上がることが困難な状況に追い込まれがちです。そばで支援する親や教師にとっても、相談できる人（他者）の存在に救われることは少なくありません。問題・課題、悩みを共有してもらってだけでも、自分一人で抱え込んでいるのとは違い、勇気づけられたり励まされたりするもので、心の負担が少し軽くなります。

教職時代に、子どもや同僚の教職員、学校以外のさまざまな人たちと出会うなかで、このようなことを学んできました。そのときつながってきた人たちとは、今も子どもたちのために、互いの力を寄せ合って取り組むこともあります。

何か気がかりなことがあるときは、遠慮なく声をかけてください。何かお役に立てることがあるかもしれません。「子育て」が「孤育て」にならないように、いっしょに考えて、できることを寄せ合っていくことが大事です。

